

物質文化にみる遠い過去／近い過去

—民具研究と考古学—

日時： 2022年12月3日（土）13:00～17:30
みなとみらいキャンパス 5007 講堂/zoom 同時開催

【プログラム】

- 開演 13:00 司会進行 安室 知（日本常民文化研究所）
13:00～13:05 挨拶 安室 知（日本常民文化研究所所長）
13:05～13:10 趣旨説明 角南聡一郎（日本常民文化研究所）
13:10～14:10 基調講演 櫻井 準也（尚美学園大学）
考古学からみた民具研究
14:10～14:20 〈休憩〉10分
14:20～14:45 報告1 野林 厚志（国立民族学博物館）
アチック資料と鹿野忠雄
14:45～15:10 報告2 角南聡一郎（日本常民文化研究所）
新しい時代のモノと民具研究
15:10～15:35 報告3 太田原 潤（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科）
民具の実測図、考古資料の実測図
15:35～16:00 報告4 小島 摩文（鹿児島純心女子大学）
大学教育における民具研究と考古学
16:00～16:25 報告5 岩井 顕彦（たつの市教育委員会文化財課）
埋蔵文化財と有形民俗文化財のはざままで—自治体における実践から—
16:25～16:35 〈休憩〉10分
16:35～17:25 総合討論 司会 角南聡一郎（日本常民文化研究所）
17:25～17:30 閉会（アンケート）

物質文化にみる遠い過去／近い過去

—民具研究と考古学—

現代社会ではデジタル化が進行する一方で、アナログな物質文化（モノ）にも注目が集まっている。人類史を語る上で物質文化は不可欠な要素であるといえる。このような中で、アチック・ミュージアムによる民具や考古遺物の収集は大きな意味を持つ。本講座では、物質文化によってわれわれの、遠い過去と近い過去の諸相に迫ろうとするものである。アチックが注目した、近い過去のモノたちは民具と称され、ミンゾク学の対象となった。一方、遠い過去の品々は考古学の対象となり、考古遺物と呼ばれるようになった。しかし近年は、過去に収集された民具を語れる人々はおらず、いわば遺物化している。考古学では、より新しい時代の資料を対象とする、近現代考古学が誕生した。両者は物質文化という大きな概念の中に包括することができる。普段はそれぞれの学問の中で調査研究されているモノを、巨視的に論じることにより、文化資源としての活用の展望や、日本常民文化研究所が、これからどのような資料を調べ考えるかが見えてくるものと期待する。本講座は、民俗学者と考古学者が向き合い、この問題を共に考え語る場である。



講師紹介

- ◆ 櫻井 準也 (尚美学園大学教授)
1958年 新潟県生まれ (考古学)
『モノが語る日本の近現代生活—近現代考古学のすすめ』(慶應義塾大学教養研究センター 2004年)
『歴史に語られた遺跡・遺物—認識と利用の系譜』(慶應義塾大学出版会 2011年)
『増補 ガラス瓶の考古学』(六一書房 2019年)
- ◆ 野林 厚志 (国立民族学博物館教授)
1967年 大阪府生まれ (人類学)
『イノシシ狩猟の民族考古学—台湾原住民の生業文化』(御茶の水書房 2008年)
“Environmental Teachings for the Anthropocene: Indigenous Peoples and Museums in the Western Pacific”
A. Nobayashi and S. Simon (eds.) (Senri Ethnological Studies 103) (National Museum of Ethnology 2020年)
- ◆ 角南 聡一郎 (日本常民文化研究所所員)
1969年 岡山県生まれ (物質文化研究、仏教民俗学)
「タグリ神信仰と石造物の転用: 仏教信仰物から民間信仰の対象への変容」『物質文化』(考古学民俗学研究 2020年)
「日式表札の成立と越境」『帝国日本における越境・断絶・残像—モノの移動』(風響社 2020年)
- ◆ 太田原 潤 (神奈川大学大学院博士後期課程)
1961年 青森県生まれ (民俗学、考古学)「漁撈活動からみたヤマアテの初源—“絵図なき漁場図”の遡及的検討—」『歴史と民俗』38 (平凡社 2022年)
「ある種の穂摘具の系譜について—ツンベラと石匙の接点—」『民具マンスリー』第52巻5号 (神奈川大学日本常民文化研究所 2019年)
「長者久保遺跡と大平山元 I 遺跡における放射性炭素年代の研究史的意義」『東北日本の旧石器時代』(六一書房 2018年)

◆ 小島 摩文（鹿児島純心女子大学 教授）

1965年 東京生まれ(民俗学)

「サツマイモとジャガイモー新しいイモ食」『日本の食文化 3 麦・雑穀と芋』(吉川弘文館 2019年)

「鹿児島県の郷土教育のあり方」『人口減少社会・鹿児島の教育のゆくえ(新薩摩学 14)』(南方新社 2020年)

◆ 岩井 顕彦（たつの市教育委員会歴史文化財課 主査兼学芸員）

1980年 兵庫県生まれ(考古学)

「北近畿出土弥生時代鉄鏃の再検討」『世界と日本の考古学ーオリーブの林と赤い大地』(六一書房 2020年)

「兵庫県たつの市二塚地区で生産された唐箕ーいわゆる「二塚系」唐箕の実態把握に向けてー」『民具マンスリー』第41巻8号（神奈川大学日本常民文化研究所 2008年）

オンライン参加についてのお願い

【ミーティングアプリ「Zoom」のご利用について】

お手持ちのスマートフォン・タブレット・カメラ付きPC等で「Zoom Cloud Meetings」アプリのインストールをお願いいたします。Zoomは無料でダウンロードできます。

また、事前に必ずZoomの動作確認をしていただいた上で、ご参加ください。

【Zoom アプリでの参加方法】

- ① ミーティングに参加後、画面右上の「表示」をクリックし、スピーカービューに切り替えをお願いいたします。
- ② ミーティングに参加後「コンピュータでオーディオに参加」をクリックしてください。
- ③ マイクをミュートし、マイクのマークに斜線が入っていることをご確認ください。
- ④ 回線状況により音ズレや遅延が発生する場合がございます。通信の良好な場所での視聴をおすすめいたします。開始時刻になるとつながります。

◇表示名の変更方法（お申込み時のお名前にしてください）

- ① カーソルを下に動かし「参加者」をクリック
- ② 画面右、一番上にある「表示名(自分)」の「詳細」をクリック
- ③ 「名前の変更」をクリック、表示名を入力し「OK」

◇スピーカービューへの切り替え

画面右上にある「ギャラリービュー」をクリックし「スピーカービュー」に切り替える

◇ご質問について

チャット機能より送信してください。

- ① 宛先 「共同ホスト」
- ② ご自身のお名前（表示名）・どなた宛・内容（簡潔に）

【その他ご案内】

今後の運営にあたり参考にさせていただきたく、終了後のアンケートにご協力ください。

回答方法は終了後にご案内いたします。※所要時間は約5分です。

ご協力をお願いいたします。

考古学からみた民具研究

櫻井 準也 (尚美学園大学)

大正時代のアチックミュージアムの設立以来、昭和 17 年 (1942) の日本常民文化研究所、昭和 50 年 (1975) の日本民具学会の設立など、わが国の民具研究は長い歴史を持つ。これに対し、わが国の考古学も明治 10 年 (1877) の大森貝塚の発掘調査によって近代考古学の扉が開かれ、その後も発展してきた。そして、隣接分野としての両者の関係を検討するうえで昭和 38 年 (1963) に物質文化研究会が発足し、加藤晋平・宇田川 洋両氏による論考 (「考古学と民俗学の間」『物質文化』21 号、1973 年) が発表されたことは重要な出来事であった。考古学と民俗学・民具学の関係は渡辺 誠氏の研究業績

(『縄文時代の植物食』雄山閣、1975 年など) にみられるような縄文時代など古い時代の文化の復元に際して民俗学や民具研究の成果を参照するという方法が主体であったが、その後は 1969 年に提唱された近世考古学や 1990 年代中頃から議論されるようになった近現代考古学において考古資料と民具を相互補完的に比較検討する方法がとられた (角南聡一郎「さまざまなモノ研究と民俗学」『日本民俗学』第 300 号、2019 年)。考古学と民俗学・民具研究の関係については、平成 4 年 (1992) の『民具マンズリー』(第 24 巻 12 号) で「特集 民具研究と考古学」が組まれたが、そのほかにも谷川章雄氏の論考 (「地下に埋もれた民俗資料」『月刊文化財』11 月号、1991 年)、朽木 量氏の論考 (「民俗学・民具学・物質文化研究と近現代考古学」『近世・近現代考古学入門』慶應義塾大学出版会、2007 年)、近年では山田昌久氏の論考 (「民具学と考古学」『民具学事典』丸善出版、2020 年) がある。これに対し、民俗学や民具研究からみた考古学については、「考古学嫌い」とされている柳田国男の考古学批判に始まるが、田辺 悟氏の論考 (「民具学の方法」『物質文化』25 号、1975 年)、福田アジオ氏の論考 (「考古学と民俗学—協業のための予備的考察—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 35 号、1991 年)、菅 豊氏の論考 (「民俗学と考古学の正しい別離—縄文言説の構築性—」『縄文時代の考古学 12 研究の行方』同成社、2010 年) などが参考になる。

本講演では、こうした考古学と民俗学・民具研究の関係に関する議論について検討したのち、民具研究と同時代の物質文化研究を实践する近現代考古学の現状について説明する。その後、両分野に共通する資料の記録方法であり、資料の見方や研究の方向性が反映される資料の実測図を取り上げ、考古学における現在の実測図の成立過程を遺物認識の観点から概観し、その意図や特徴、民具の実測図との違いを指摘する。また、これに関連して生活用具に残された使用痕が機能研究だけでなく、使用者の身体行為の記録媒体として捉えることができる点についても触れる。最後に、今回の講座が民具研究と考古学の新たな関係を構築する契機となるだけでなく、近現代考古学の今後のあり方を考える機会となることを期待したい。

アチック資料と鹿野忠雄

野林 厚志 (国立民族学博物館)

1. 目的

本発表の目的は、地理学者であり民族学者でもあった鹿野忠雄のアチックでの収集活動の意義を台湾原住民族 (以下原住民族) の歴史と未来という観点から示すことである。そのために、以下の 3 つの内容について報告する。

- (1) 台湾における鹿野の民族資料収集
- (2) 遠い過去へのまなざしー「台湾原住民族の物質文化とその類縁」
- (3) 近い過去から未来へむけた原住民族の実践と博物館

2. 台湾における鹿野の民族資料収集

鹿野が台湾において民族資料を収集したことはよく知られている。地理学をもともと専攻していた鹿野は、幼いころからの趣味であった昆虫採集を昆虫の宝庫であった台湾において精力的に行った。その過程で鹿野は台湾の山岳や島嶼、そこに住む原住民族の文化に魅せられることになった。洪澤敬三の知遇を得た鹿野は、昭和 12 年 (1937 年) に南部のパイワンと島嶼のヤミの資料をアチックの活動として収集しているが、これら以外にもタイヤルやツォウ、ブヌンの資料を鹿野は自身の調査を通して収集していた。鹿野が収集した資料の収集地等の情報が、資料にひもづけられた記録によって明確にわかるものはアチックでの収集によるものが多く、それ以外の資料は鹿野の著作等の記載から収集地等を推測する必要がある。

3. 遠い過去へのまなざしー『台湾原住民族の物質文化とその類縁』

鹿野が自ら収集した資料や現地で観察した結果にもとづき、原住民族の物質文化について総括したのが、『東南亜細亜民族学先史学研究 (下)』(1946) に所収された「台湾原住民族の物質文化とその類縁」である。ここで、鹿野は原住民族の物質文化は全体として大陸地域にむすびつくことを示すとともに、物質文化の特徴と当時の言語学研究の知見等とをあわせて考察したうえで、台湾島への集団の移動が大陸部からであったことを仮説として示した。1980 年代以降の言語学によるオーストロネシア祖語の再構築に先立つこと約 40 年のモデルであった。鹿野はさらに東南アジア諸地域も含めた人類の移動、文化の移動を考えるうえで、民族学と言語学の調査はもっとも重要としつつ、体質人類学 (自然人類学) からの新たな知見を期待すると論考をしめくくっている。これらのことは現在、遺伝学研究から太平洋地域のオーストロネシア系集団の移動が盛んに論じられていることを考えると、慧眼の至りと言っても過言ではないだろう。

4. 近い過去から未来へむけた原住民族の実践と博物館

鹿野が台湾で収集した資料の多くは現在、国立民族学博物館 (以下民博) に収蔵されており、近い過去の原住民族の物質文化を研究するための一級の資料である。同時に、これらの資料は現在の原住民族にとって未来を創りだすために重要な役割を果たしている。民博では資料の基本的な情報を日本語、英語、中国語で参照可能なデータベースを構築し、館外に向けてオンライン公開を行ってきた。これらの情報を活用しながら、原住民族は民族の境界をこえた資料調査を民博で実施してきた。その目的は祖先の技術にふれ、自らの新たな創作に祖先の智慧や思いを継承することであった。COVID-19 による感染症が猖獗するこの数年来、オンラインによる情報公開も含めて研究所や博物館、鹿野の収集資料が果たす役割をあらためて考えてみたい。

新しい時代のモノと民具研究

角南 聡一郎 (神奈川県立大学日本常民文化研究所)

筆者は 2020 年春以降、日本常民文化研究所が刊行する『民具マンスリー』の編集に携わっている。毎月必ず 24 頁の雑誌を刊行することはなかなかの労力を伴うが、得られるものも多い。ここでは『民具マンスリー』編集会議を通じて知り得た、新しい時代のモノにまつわる話を語ってみたい。

日本民具学会による『民具学事典』(2020,丸善出版)で、佐野賢治は次のように述べている。「民具を「我々の同胞が日常生活の必要から技術的に作りだした身近卑近の道具」『民具蒐集調査要目』(1936)と狭義に定義すると、工業製品に囲まれた今日、この民具の定義を今一度、考え直す必要がある。しかし、我々が日常生活を送るためには自動車、パソコン、スマートフォンなど広義の道具が必要不可欠である。「民具」の現代的意義を、連続性(民俗-変遷・改良)と非連続(歴史-変化・革新)の両面から検討する必要がある」(佐野 2020)。かつての『日本民具辞典』(日本民具学会編 1997,ぎょうせい)で取り扱われたのが、あくまで前近代的なモノであったのと対照的である。

現代の若者のうち、概ね 1990 年代中盤または 2000 年代序盤以降に生まれ世代を、Z 世代と呼ぶ(原田 2020)。Z 世代にとって生まれた時には既に存在した、インターネットの発展はデジタル化を促進し、モノやサービスは「所有」から「利用」へと変化している。これはサブスクリプションと呼ばれるビジネスによって拡大していった(雨宮 2019)。さらにここ数年は、メタバースと呼ばれるインターネットにおける「仮想世界」あるいは「もう一つの世界」が展開され、リアルとサイバー空間の融合がはじまっているという(岡嶋 2022)。こうした状況の中、われわれアナログな昭和世代はデジタルなモノと向き合う必要に迫られている。

少し時を戻してみると、近い過去のモノとの対話は(それを民具研究と呼ぶか否かは一旦保留して)既にスタートしているだろう。いくつかの例をキーワードで示してみると次のようなものがある。近現代考古学、ロボット、ファミコン、新しい素材、身体とモノ、横井庄一製作の道具、福祉用具、義肢装具、ユニバーサルデザイン、インクルーシブデザイン。

ロボット工学者の森政弘は、1970 年にロボットの外観をより人間に近づけるという過程において、そのロボットに対して人間が抱く親和性について論じた。類似度が上がっていくに従い親和感も増加していく。しかし、類似度がほとんど人間に近くなった近傍で、親和感は急激に失われ、人間は気味悪く感じるようになる。この現象を森は「不気味の谷」と呼んだ(森政弘研究会 2020)。例えば、ドイツのテクノバンド・クラフトワーク(Kraftwerk)が、1978 年にリリースしたシングル「The robots」で展開したパフォーマンスを見れば理解しやすいだろう。

当初はロボット同様に違和感のあったデジタルアニメーションも、不自然さはほとんどなくなっている(あるいは見慣れたか)。先に述べたリアルと融合しはじめたメタバースにおいては、人工物に対する違和感(世代間の捉え方に差異はあるものの)もっとなくなっていくのかもしれない。

未来の民具研究について考えようとするならば、遠い過去のモノもそうであるが、近い過去のモノについて、そして現在のモノについて調査研究することが肝要であると考え。それら対象は、異なる分野の研究対象となっている場合が多いが、まずは時間軸を超えてそれぞれのモノと対話できる場を設けることが急がれるのではなかろうか。

2022 年 12 月 3 日 (土)

民具の実測図、考古資料の実測図

太田原 潤 (神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科)

モノに関する実測図がどのようにして成り立ってきたかについては、民具研究の視点からは名久井芳枝、考古資料研究の視点からは田中英司により既に論じられているが(名久井 1986 他、田中 1991 他)、本発表においてはアチック・ミュージアム(日本常民文化研究所)[以下アチックと省略]における民具研究を手掛かりに紐解いてみたい。

アチックによる初期の民具研究を特徴づける例として、『所謂足半(あしなか)に就いて〔豫報〕』(アチック・ミュージアム編 1936)と高橋文太郎による『輪櫛』(高橋 1942)があるが、それらは実測図の歴史を考える上でも画期的なものであった。

前者は、モノの表現に X 線写真を取り入れた点が特筆される。これにより、足半の内部構造や製作法が可視化されることになった。X 線の活用はすぐに普及するには至らなかったが、考古学研究においては 1978 年以降に具体的な成果に結実し、保存処理や実測図の作成にも活用されるようになった。近年は X 線 CT を用いた研究も進展している。

一方、後者は輪櫛の正投影の正面図に側面図が添えられている点が注目される。作図者は東京美術学校西洋画科卒の画家にして民具研究も行った染木煦である。図の細密さは、エッチング作家でもある染木の技量が生かされたものと思われる。また、同年には杉山寿栄男によっても側面図や裏面図が添えられた細密な民具の図が示されている(杉山 1942)。これらは第三角法を用いた図と見ることができるのであるが、その後の民具の実測図に継承された様子は見られない。明らかに製図の知識に基づいた実測図としては、アチック同人の磯貝勇による実測図(磯貝 1958 他)などがあるが、現在の民具実測の方向性は、名久井芳枝らによる研究と実践(名久井 1986 他)や、日本民具学会、神奈川大学日本常民文化研究所などの取組みが反映されたものとなっている。

考古資料の実測においては濱田耕作の『通論考古学』(濱田 1922)の果たした役割が大きい。しかし、製図法を明確に意識した実測図は、近代日本考古学の最初の報告書でもある『大森介墟古物編』(E.S モース 1879)に既に見られる。作図は教育博物館画工の木村静山による。静山は、製図工の経験もあるモースの意図を巧みに汲み取り、傑出した実測図を作成したのであった。残念ながらその作図法が引き継がれることはなかったが、明治期には他に神田孝平や佐藤部も注目すべき図を残している(神田 1884、佐藤 1887 他)。

佐藤部は東京人類学会会員にして江戸時代の絵師の薫陶を受けた画家でもある。部以前の近世においても多彩な人物が多く図を残しており、民具の実測図の初源を大蔵永常の『農具便利論』(大蔵 1822)に求める見解もある(大脇 1985 他)。しかし、それ以前の段階においても菅江真澄を始め、民具や考古資料の図を残した人物は少なくない。それらの中には形態や大きさの情報を読み取ることできる図もあるが、正投影で実寸の正確な図が描かれた例としては藤貞幹の『集古図』(1775)が特筆される。こうした近世の図の中にも第三角法的に側面図が添えられるものも見られるが、それらは基本的に平置き可能な資料であり、自立可能な立体的資料を水平視線で描く例は見られない。この傾向は近代まで続くことから、外来の製図的な図法とは別に、側面を示す在来の描法が伝統的に存在していたと見ることができよう。

このような変遷を経て実測図は発達を遂げ、現在見る考古資料の実測図は単に大きさや形態を正確に示すだけでなく、それぞれの時代や器種に応じた製作技術や製作工程に関する情報も盛り込まれたものとなっている。今日ではデジタル化も進行しているが、モノを観察すること、その結果を図に表現することの重要性は大事にしたいと考える。

大学教育における民具研究と考古学

小島 摩文 (鹿児島純心女子大学)

筆者に与えられた当初のテーマは、「鹿児島大学における民俗学と考古学の相互乗り入れの教育について」であった。最終的な演目はやや広いものになったが、ここでは、鹿児島大学で 1980 年代前半から 1990 年ごろまでおこなれた民俗学と考古学を乗り入れた教育を受けた人材がその後どのような活躍をしたかについてお話することで、民俗学と考古学が協働することの重要性について考えてみたいとおもう。

当該コースが置かれたのは、鹿児島大学法文学部人文学科の考古・文化人類学専攻である。このコースが企画された主な理由は、卒業生が鹿児島県内の歴史民俗資料館に学芸職として勤務したときに民俗分野も埋蔵文化財分野も扱えるようにという配慮があったと思われる。

当該コースの民俗学を担当したのは下野敏見、考古学の担当は上村俊雄である。二人とも現在も続けている隼人文化研究会の設立メンバーである。1975 年から雑誌『隼人文化』を発行したこの会は、民俗学、歴史学、考古学の融合を鹿児島の地でめざして発足した。このコースが始まる前から鹿児島では民俗学、考古学の相互交流が行われていた。

カリキュラムは、民俗学、考古学の両方の講義、演習、実習の必修とした。概論に始まり、両分野の演習としてそれぞれの資料の実測図作成などがあり、総仕上げとして 2 年間で 6 回フィールドワーク「文化人類学野外実習」「考古学野外実習」の履修が必修となっており、民俗調査と考古の発掘とを経験することが求められていた。

この専攻の卒業生の多くは行政の一般職や民間企業に就職したが、中には、市町村立の歴史民俗資料館の学芸職に進んだ者や、行政の埋蔵文化財担当者となった者もいる。本発表では、そうした卒業生を紹介したい。

A 氏(コース 1 期生)は、鹿児島県の埋蔵文化財センターに勤務後、小学校校長として南種子町へ。南種子町で民俗調査。

B 氏は、鹿児島県南薩地域の知覧町の歴史民俗資料館に勤務。その後、ミュージアム知覧立上げに参加。定年までミュージアム知覧に勤務。

C 氏は、南薩地域の G 町に採用。教育委員会の埋蔵文化財担当者となるが、民俗も扱う。
合併にともないミュージアム知覧に勤務。

D 氏は、鹿児島大学埋蔵文化財調査室に勤務。その後、知覧町歴史民俗資料館に勤務。
ミュージアム知覧立上げに参加。その後、独立しミュージアムプロデューサーとなる。

E 氏は、鹿児島大学埋蔵文化財調査室に勤務。現在は、鹿児島大学埋蔵文化財調査センター長(教授)。

F 氏は、現屋久島町で歴史民俗資料館に勤務。その後、福岡市博物館学芸員(民俗担当)。
その後福岡市博物館学芸課長。

個人情報なども含まれるため、紙面では多くは語らないが、発表では、エピソードなどを交えながら、民俗学(民具研究)と考古学の両方を学ぶことの重要性について考えたい。

埋蔵文化財と有形民俗文化財のはざま—自治体における実践から—

岩井 顕彦(たつの市教育委員会文化財課)

はじめに

本報告では、近世の瓦を題材とする。対象地域は兵庫県たつの市龍野伝統的建造物群保存地区(以下、伝建地区と略)である。当地区は周知の埋蔵文化財包蔵地(いわゆる遺跡)の範囲内に位置する。そのため、同じ「近世の瓦」であっても、地下か地表か、存在した位置によって取り扱いが異なる。

伝建地区内では、建物は文化財的な扱いを受ける場合もあるが、パーツである瓦は耐用年数の長い消耗品という位置づけで、文化財保護の枠組みからは外れている。こうしたなか、何とか良質な瓦を保存しようとした文化財保護行政担当者の模索を報告したい。

問題の所在

伝建地区内において、近世瓦は発掘調査で出土すれば遺物(文化財)となるが、屋根の上にあるものうち、耐用年数が過ぎたものは、不要品(産業廃棄物)となる。

出土した瓦(遺物)より現用の瓦の方が概して保存状態は良いが、既存の文化財保護の枠組みで産廃扱いの瓦の廃棄を防ぐことは難しい。保存状態が良いことを理由に廃棄される瓦を収集しようとしても、文化財収蔵庫が飽和状態にあること、収集の理由・根拠が不明確なことから組織内のコンセンサスは得られにくい。さらに、伝建地区は首長部局、埋蔵文化財を含む他の文化財は教育委員会部局と所轄が分かれていることも問題を複雑にしている。

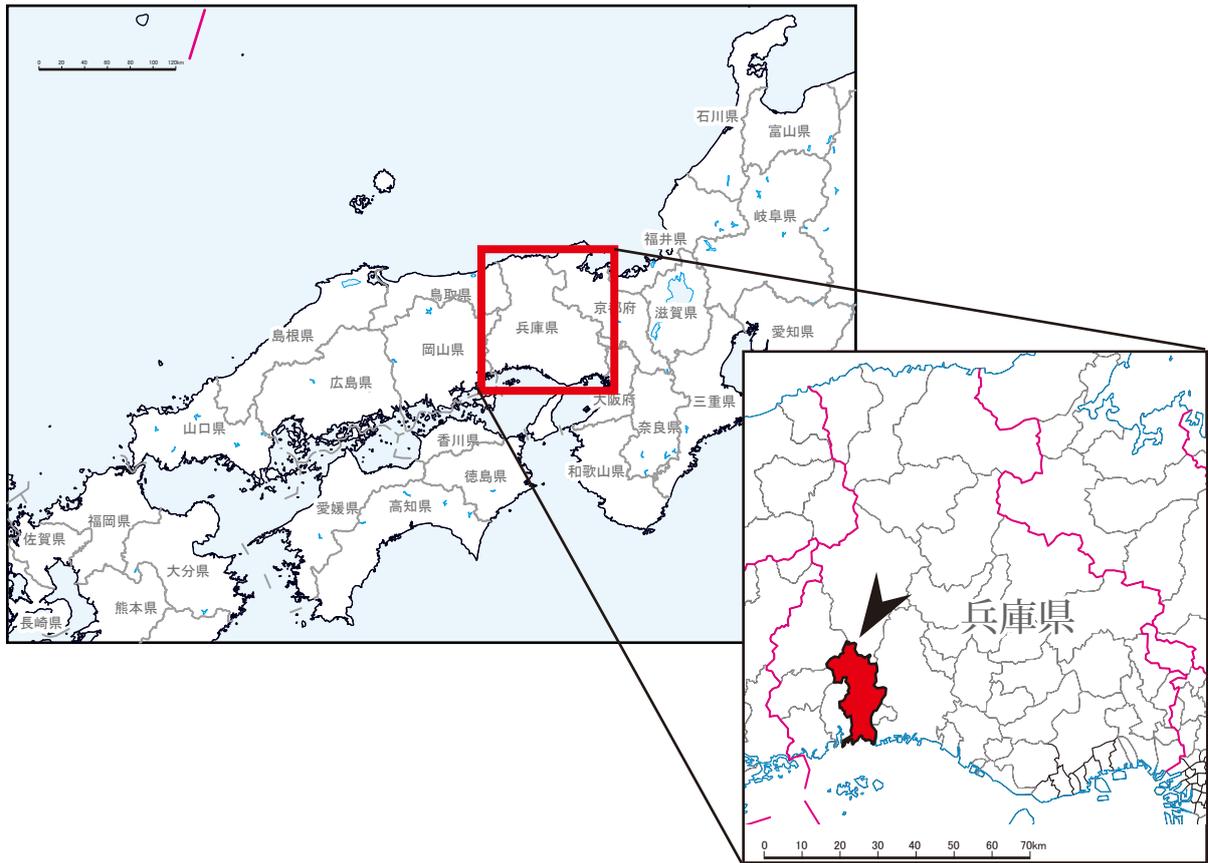
取組み状況

伝建地区内では、「伝統的建造物の新規特定」が行われることがある。この際、建物の評価、わけても建築の時期決定が難しく、担当者を悩ませている。そこで、瓦の編年観が時期決定の一助となる点に着目し、「伝建地区の円滑な保護のための資料収集」の名目のもと、伝建部局と文化財保護部局の担当者間で申し合わせを行い、修理の際に廃棄される瓦の一部を収集・調査・保存している。遺物としての瓦やその編年観に詳しい文化財保護部局が専門性を応用して伝建部局の業務の支援を行うため、廃棄瓦の一部を保存する、という枠組みである。

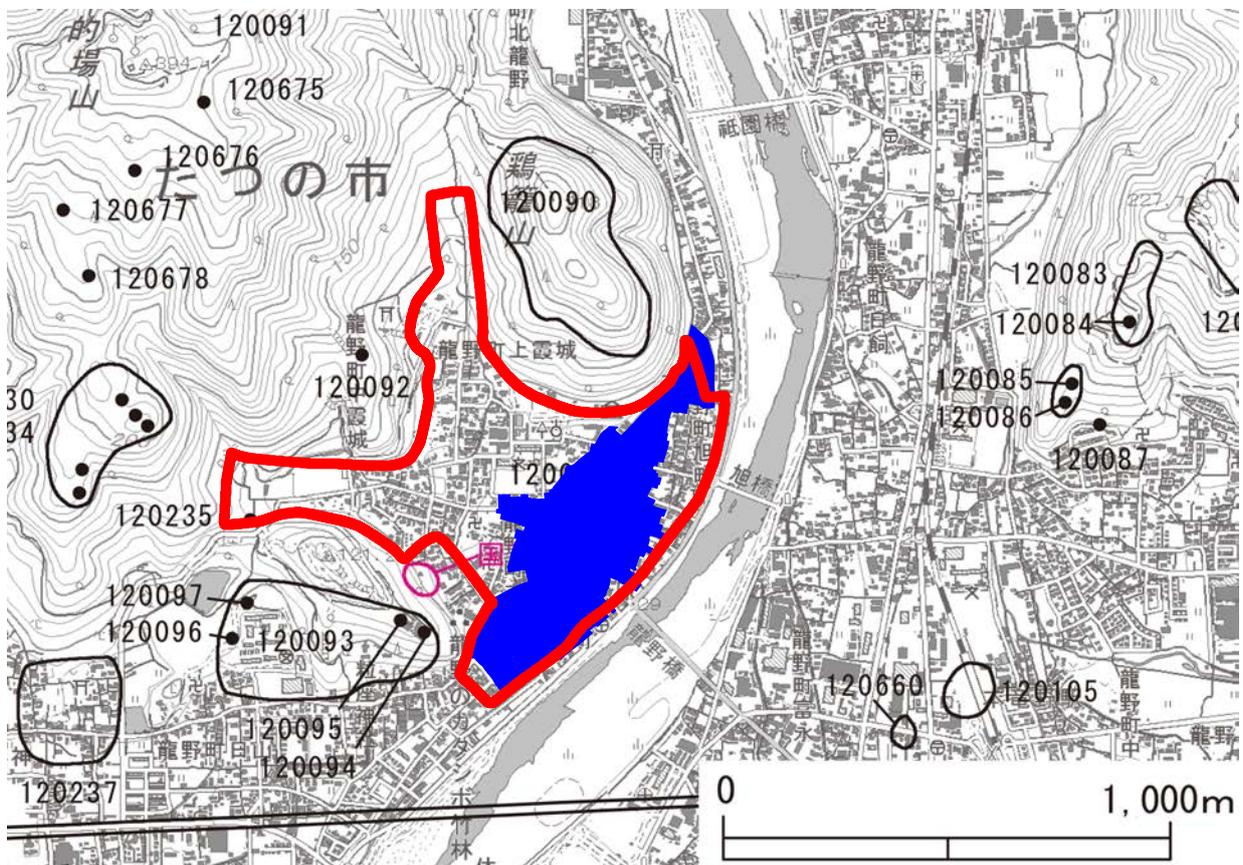
名目との関係上、保存対象は編年の行いやすい軒瓦や有銘、刻印瓦が中心となり、さらに、同種のもを多数保存することは難しい。また、行政組織間での「申し合わせ」に基づく所有者、施工業者への「依頼」であること、取り組みが始まって日が浅いことなどから、さまざまな困難も存在するが、一定の資料の蓄積が図られつつある。

むすび

たつの市の取り組みの根拠となるのは、行政組織の担当者間の「申し合わせ」にもとづく所有者や施工業者への「依頼」でしかない。それでも、事務ルーチンに乗せていくことで、担当者個人の「熱意」に頼るより多少は円滑に資料の収集、ひいては適切な保存と活用が進められると考えている。



たつの市の位置



龍野城下町遺跡の範囲（朱線）と龍野伝建地区の範囲（青塗）



龍野伝建地区の現状